かみさまからのおくりもの

佐藤　寛子

友人と二人で表参道を歩いた。

休日に少し遠くまで出かけるのは久し振りだ。

ここのところ毎日遅くまで仕事があり、夕飯は十時を過ぎることもある。保育が終わると、職員室の机では一斉にパソコンが起動し、まるでどこかの会社に迷い込んだようだ。

子どもたちのために、と取り組んだ幼小連携の研究も、パソコンの技術の獲得と向上には十分つながったが、肝心の子どもたちへはどうつながっていくのか。前途多難である。

おそらく文化が異なるのだろう。生活まるごとを主張する幼稚園と、なんでも取り出して教えたがる小学校。子どもたちへの伝え方にはいろいろあっていいのだと、それは分かっている。幼稚園も、生活とは少し違った次元で子どもたちに伝えることが必要な場合もあるだろう。けれど、子どもたちがこの先、自分の力で自分らし

く生きていけるように、学んだことが生活に結びついていくような教育でなくては……と思うのだ。

「幼稚園では、きちんと挨拶の指導をしないのですか？」と小学校の教師に訊ねられた。

幼稚園で交わす挨拶は、「指導」なんて言葉とは程遠いもっと深い大切な行為だ。毎朝も子どもたちのいつもと同じ元気な声と表情にほっとしたり、冴えない面持ちで登園してきた人には、何かあったのかしらと気持ちをかけたり、人と人とが関わりあっていくための最初の出会いだと思う。

「ねえ、これ、いいと思わない？」

急に、友人の声がした。

せっかく気分転換に遊びに行こうと、二人で出かけてきたのに、考えることは、やっぱり仕事のことなんだなぁーと、なんだかむなしい気持ちになった。

私たちは、いつの間にか小さな雑貨屋にいた。

彼女の指差している先には、ガラスでできたしゃれたオブジェがあった。窓辺にぶら下がっているそのオブジェは、上の部分に小さな穴が開いていて、水が入るようになっている。

「お部屋の中に、虹ができるんですって！　なんだか素敵だと思わない？」

「そうね」

なんとなく気のない返事をしながら、オブジェに添えられた説明書きを読んだ。窓辺に入り込んだ太陽の光がそのオブジェを通ると、プリズムのように光を拡散させるらしい。

「お部屋にあったら、子どもたち、きっとよろこぶんじゃないかなぁ」

友人に勧められて、私はそのオブジェを買うことにした。

＊

四歳児を受け持つのは、二度目である。

心もとない感じで必死に保育者にくっついて生活していた三歳の頃とは違って、四歳になると、だいぶ人間ら

しくなってくる。からだの動きがスムーズになるにつれ行動範囲も広がって、少しだけ生きる自信のようなものが見えてくる。

言葉の吸収も著しい。昨日まで、「まぁーちゃんね」なんて自分のことを呼んでいた人が、「おれさぁー」などと友だちに話しかけているのを聞いて驚くことがある。

最近、高齢者を困らせている「オレオレ詐欺」は、四歳児の言語能力のまま止まってしまった気の毒な人の犯行かもしれない。

子どもたちの、人を傷つけるような言葉の吸収に、ついつい気持ちがいき、がっかりするようなことが多くあるのもこの時期だ。

けれど同時に、子どもたちの使う言葉にうっとりし、生きるエネルギーを分けてもらうことも実は多い。

風邪をひいて幼稚園を二日ほど休んだ。毎日遅い時間まで残って仕事をしているので、二日も休むと、ずいぶん久し振りのような気持ちになる。たまっているメールを読まなくては……と机を見ると、かわいい手紙が二つ置いてあった。

ひろこせんせいえ
おかぜ　だいじょうぶですか
ルナのおうちにあそびにきてください
おかぜがなおったらね　　ルナ

さとお　ひろこせんせい
ちゃんと　みんなとあそべたよ　　ゆか

鉛筆を握りしめて、一生懸命集中して書いている二人の様子が浮かんでくる。思いを言葉にすることが難しく、伝わらないもどかしさを抱え、いらだつことの多かった二人だった。表した文字は、優しい気持ちでいっ

ぱいだ。思いを文字で伝える方法を知り始めた喜びであふれている。

なぞなぞや早口言葉、唱え言葉が大好きになるのもこの時期らしい。

おそらく、テレビの影響だと思うのだが、クラスで「じゅげむ」が大流行した。

じゅげむ　じゅげむ　ごこうのすりきれ
かいじゃりすいぎょのすいぎょうまつ
うんらいまつ　ふうらいまつ
くうねるところにすむところ
やーぶらこうじのぶらこうじ
ぱいぽ　ぱいぽ　ぱいぽのしゅーりんがん
しゅーりんがんのぐーりんだい
ぐーりんだいのぽんぽこぴーの　ぽんぽこなーの
ちょうきゅうめいのちょうすけ

『落語絵本じゅげむ』（クレヨンハウス）は、子どもたちの大好きな本となった。私はこの本を「よんで！」と子どもたちに何度せがまれただろう。友だちの名前を覚え始め、名前を呼び合う関係がクラスに出来つつある頃だった。

呪文のように長いこの言葉が、大事な大事な一人息子のために両親がいろんな人に相談して決めた「名前」だということも、子どもたちの気持ちをひきつけたのだろう。

「じゅげむ」は、結局、クラスの子どもたち全員が覚え、みんなが集まった時間に、誰かが唱え始め、いつの間にか私も巻き込まれての大合唱になることが多くなった。早口で言ったり、小さい声で言ったり、掛け合いで言ったりと、三学期になっても、思い出すとみんなで唱えて楽しんだ。

子どもたちの、ものごとを吸収していく力は、生きるエネルギーそのものだ。そして、言葉の持つリズムや、みんなの呼吸を感じあわせて見ることを、からだ全体で

楽しむ子どもたちに、私は何度元気をもらっていることだろう。

＊

さて、表参道で買ったガラスのオブジェは、保育室の園庭に続く入口にぶらさげることにした。保育室の窓はあいにく刷りガラスになっていて窓を開けずに光が差し込む場所は、そこにしかなかった。

太陽の居場所によって、うまい具合にガラスに光が差し込むと、保育室の中は、小さな虹でいっぱいになる。ガラスが風で揺れると、床や天井の紅色の光は、そろってやさしく踊りだすのだ。

晴れた日の朝、保育室のたくさんの小さな虹を独り占めするのはもったいないと、子どもたちの登園を待ちわびた。

「わぁーきれい。どうしたのー」

「あーにじだぁー。ここにも、ここにも！」

と、予想通りの子どもたちの反応を嬉しく思いながら、オブジェを飾ることを勧めてくれた友人の、私への優しさを思った。

この日の保育は、不思議だった。

子どもたち全員が登園し、思い思いに遊び始めた頃には、虹色の光は姿を隠し、保育室はいつもの様子に戻った。

不思議なことが起こったのは、帰りの集まりの時間である。

子どもたちから突然、

「おおきな古時計がうたいたい！」

という声があがった。

彼らが三歳児クラスの時、ある男性歌手の歌いあげる「おおきな古時計」がヒットし、テレビや街中でよく耳にするようになった。子どもたちの中にも、保育中に口ずさむ人があったので、私もいっしょに歌ったり、帰りにピアノの伴奏でみんなで歌ったりした。あの時は、歌詞の意味を分からずに歌っていた人がほとんどであった

と思う。

♪おじーさんといっしょにチクタクチクタク♪

の部分になると、なんだか、うれしくなるようで、隣の人と顔を見合わせて、ニコニコしながらからだを動かして歌っていたのを思い出す。

あれから、一年。

「この歌はね。気持ちをこめて、だいじにだいじにうたう歌なの。だいじにだいじにうたうとね、みんなの気持ちが、ちゃんとお空にとどくのよ」

子どもたちは、私の話をいつになく真剣に聞き、私もとびっきり気持ちをこめてピアノを弾いた。子どもたちの歌声は保育室に静かに響いて、彼らの思いは、私にしっかり伝わってきた。歌い終わった後の、一瞬の沈黙。

「せんせい、みて！」

子どもたちの指差す床に、虹色の小さな光がひとつ、きらきら瞬いていた。

「せんせい、おそらにとどいたんだね。そらからのおくりものだ」

＊

保育が終わったあと、丁寧に掃除をしながら、今日あったいろいろなことを思い出したり、隣のクラスの先生と相談しながら、明日の教材を用意したり、お茶を飲みながら、子どもたちの様子をみんなで話し合ったりと、そんな日々を懐かしく思う。保育は、当り前のことの中に、大事なことがいっぱいあった。新しいことをすることだけが、保育の充実ではないはずだ。大事にしてきたことの意味を、もう一度考える時がきたのかもしれない。

子どもたちとの豊かな時間に感謝しつつ、力まず自然に生きていきたいと、心より思う。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）